福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

教養教育(共通教育)雑感

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 和之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7999

教養教育(共通教育)雑感

教育地域科学部人間文化講座　松田　和之

かつて、ある程度の規模を有する国立大学には教養部と呼ばれる教育組織が置かれていた。入学した学生は、まず教養部の教員が担当する多種多様な教養教育科目を必要数以上履修し、晴れて教養課程を修了したのちに各々の専門課程(学部)へと進級するのが常だった。教養部は旧制高校などを前身に持つ教育組織であり、そこに属する教員は学部教員(本来の大学教員)よりも格下に見られる傾向があったという。私が教養部に学んだ頃、授業中に突然、担当教員が名指しで学部の教員を批評し始めたことがあった。今にして思えば、教養部に潜在していたある種の反骨精神が、あの時何かの弾みで一気に噴出したのかもしれない。そうした感情的なわだかまりも、1991年以降、全国的に猛威を振るった教養部改革の嵐によって、解きほぐされないままどこかへ吹き飛ばされてしまう。教養部の解体は改組の当事者である教員側にとってはドラスティックな変革となったが、学生の視点から見た教養教育の在り方自体に劇的な変化があったとは思えない。私は現在、縁あって福井大学の教養教育(共通教育)に教員として関わっているが、日々折々、受講生たちの姿にふと教養部時代の自分の姿を重ね合わせることがある。

あの当時、新入生の間で「講義情報」なる怪しげな小冊子が出回っていた。そこには教養課程のすべての授業の内容や単位の取りやすさが面白おかしく点数化されており、履修の際にはすっかりお世話になってしまったが、その備考欄にけばけばしく記された担当教員のニックネームが、何といってもふるっていた。「魔王」を恐れてやむなく「撃墜王」に挑み、あえなく撃墜されてしまったこともあった。幸いにも「天使」のご加護を得て大事には至らなかったが、こうした洒落にならない話を洒落にしてしまうのも、時間の持つ力なのだろう。刺激的な言葉が躍る「講義情報」の中で、備考欄には何も書かれていない影の薄い科目のひとつに「西洋文学」があった。教養部時代に私が最も熱心に受講し、最も大きな影響を受けた授業である。担当は、初老のもの静かな男性教授。夕日が教室に射していた記憶があるので、5限目の授業だったのかもしれない。毎回、欧米の文学作品がひとつずつ取り上げられ、作者や時代背景について概説がなされたのち、作品を部分的に読みながら、その魅力と文学史的な意義について解説が加えられた。受講生は少なかった。眠気に打ち克っている者はさらに少なかった。一緒に受講し始めた友人は途中から出て来なくなった。老教授は小声でぼそぼそと話されるので、正面前列に席を取らなければならず、それが何とも気恥ずかしかったことを覚えている。要するに、最近はやりのFDや授業評価の観点からすれば、やり玉に挙げられてもおかしくない授業であったが、当時の私には、黒光りした木造の校舎に淡々と流れる静謐な時間がかけがえのないものに思えたのだった。記憶の性格上、この回想が多少なりとも美化されていることは否定しないが、私が学部で仏文学を専攻することになるきっかけがこの授業にあったことは、紛れもない事実である。

教養教育とは、「出会いの場」だと思う。多様な分野から所定の単位を取得する必要があるため、学生は専門知識やキャラクターが千差万別な教員たちと嫌でも遭遇することになる。また教室は時に、学部や学科を異にする学生同士の出会いの場ともなるだろう。そして何よりも、人生の進路をも左右し得る学問との出会いが、そこにはある。教養教育が「出会いの場」としての機能を今後とも維持してゆくためには、まずもって開講科目の多様性を確保しなければならない。だが、大学が市場原理に染まり、効率重視・即効性重視の考え方が幅を利かせるようになった昨今、実学志向の科目が重んじられ、リベラル・アーツ的な性格が顕著な科目は肩身の狭い思いをさせられている。これは何も大学の教育現場に限ったことではなく、社会全般において、今日、多様な価値観を認めるゆとりがともすれば失われがちであるように思える。グローバル化の美名のもとで、約2500もの言語が(つまりは文化が)消滅の危機に瀕している現実に、私たちは無頓着になっていないだろうか。こうした風潮に潜む危うさについて、価値観の画一化された社会が「頽廃」の名のもとに芸術・文化を圧殺し、挙げ句にホロコーストの惨禍を引き起こした過去の歴史から学ぶところは大きい。ナチズムを(ヒトラーを)悪者にすればそれで済むような単純な問題ではない。価値観の多様性が損われて特定のイデオロギーが絶対視される集団心理のメカニズムにこそ、未曾有の悲劇を招いた根源的な要因を認めてしかるべきだろう。皆が同じ方向を見つめる社会よりも一人ひとりが別々の方向を見ている社会の方が、実は健全なのである。教養教育においても、この逆説を肝に銘じる必要があるのではないだろうか。